

# 今思うこと

## This and That which I Think now

今栄東洋子 Toyoko IMAE

本年4月に国立台湾科技大学に赴任し、現在、研究室の立ち上げの真最中である。大学を卒業した1965年に就職したので、台湾での契約の5年を全うすると、49年の勤務歴になる。この長い年月の間にはいろいろなことがあったし、事実、順風満帆であったとは決して言えないが、年とともに風化したのか、今は淡々と時折の出来事を思い出す程度である。

今に至る大学教員としての私の人生を方向付けたのは、奈良女子大学4年生の時に当時非常勤講師として講義にいられていた大阪大学教授の研究室で文部技官の職があると声をかけていただいたことがきっかけであった。大阪大学では、同様な文部技官の女性何人かおられたが、結婚または出産を機会に退職されるのを見聞きして、女性が仕事を続けるのは大変なこととの印象をもった。私自身は結婚を機に名古屋に移り住むことになったが、幸いに名古屋大学理学部化学科の文部技官に転職できた。そこには物理化学分野の大先輩の二人の女性研究者がおられ、心強く感じた。のちに、さらに二人の女性研究者が化学科のメンバーとなったが、それら女性研究者はそれぞれの事情（退職や転職）で化学科を去られ、その後は、2006年に定年退職するまで、化学科の教官・教員は私一人であった。

男女共同参画が制度化され、女性研究者の研究環境が改善される時代が来るなど想像もできない時代に仕事を続けながら子育てをした。第1子のときには零歳児保育園はまだなかったが、名古屋市が認可した保育園福祉員の家に預けることができた。アメリカには高校生からシニアまでの年齢層のベビーシッターがいるが、博士研究員として渡米した私の子供のベビーシッターは子供をもつ若いお母さんであり、同い年の自分の子供と一緒に私の子供の面倒を見てくれた。風習の

違いからか、日本には家庭で保育してくれるこのようなベビーシッターは普及していない。帰国した年に夕方6時までの長時間保育園が名古屋市に1か所開園し、そこに入園できた。小学生になると学童保育所があり、働く時間は保証されたが、重大問題は子供が発病・怪我をしたときである。子供に付き添っていたい思いと何日も欠勤している後ろめたさとの葛藤があった。保育園が普及した今でも病児保育の問題は難しい課題ではないだろうか。

ITの普及と並行して、この10年ほどの間に大学はめまぐるしく変遷している。私が過ごした助手時代には、教育義務は学生実験のみであったので、それ以外の時間のほとんどを研究に費やすことができた。助教授になって、講義、学生の指導、会議等の義務が生じたが、それでも教授の半分位であった。ところが今の教員の状況はかなり違う。それぞれ程度や理由は異なるかもしれないが、概して教員は多忙で、教育・研究に携わる時間が激減している。学生が指導教授と話をしたのは年に数えるほどの極端な例を耳にしたことがある。もちろん、先導的・競争的研究の資金的促進、女性研究者の積極的起用、若手研究者の独立した研究支援など、画期的な向上もある。一方で、グローバル化に伴って、諸外国、特にアジアの新興諸国の追い上げ、留学生・外国人博士研究員受け入れ問題も新規緊急課題である。これら課題以上に重要な問題として、大学・大学院教育改革、大学の質と量の見直し、大学教員意識改革が問われている。このような時期に大学人として残る数年を過ごす機会が与えられたのを機に、若い研究者の研究教育指導と研究教育行政の改革に少しでも寄与したいと、私は今思っている。



今栄東洋子 Toyoko IMAE

国立台湾科技大学精誠荣誉学院工程研究所  
講座教授、理学博士  
総合科学技術会議・議員  
日本学術会議・会員  
E-mail: imae@mail.ntust.edu.tw